

令和8年度第1回加西市立図書館協議会議事録

日 時 令和8年7月29日（水） 15:00～16:45

場 所 加西市立図書館4階

出席者 委員10名：笹倉剛、衣笠朋子、渡邊雅美、千石和加子、高瀬由美、
金澤泰子、稲岡ゆかり、吉村靖、深江克尚、鷺尾小百合
教育委委員会1人：伊藤教育部長 図書館2人：桜井館長、民輪館長補佐

1 開会（15:00）

2 あいさつ

（1）会長

・図書館を学ぶ施設として位置づける動きが全国的に広がっている。1970年代の暮らしの中に図書館をという運動の時期が最も活性化していたが、現在は、業務委託の導入など経費削減を最優先とする政策が目立ち、図書館にとって冬の時代と言える。加西市のような直営体制は理想的であり、協議会での活発な意見交換を期待する。

・AI（人工知能）の時代における教育の在り方が重要である。AIは優れた回答を提供するが、それを理解し判断し活用するのは人間である。子どもたちや利用者が図書館を通じて学ぶ機会をどのように提供していくかが、これからの図書館運営において極めて重要となる。

（2）教育部長

・令和8年4月1日より毎週水曜日の定期休館日を設けたことで、水曜日に保護司会主催のジャズコンサートを交流プラザで開催するなど、施設全体の多様な活用方法が生まれている。また、職員の働き方にメリハリをつけるという点でも効果が出ている。

・学校との連携強化により、子どもたちの図書館利用は増加傾向にあるが、すべての層へのアプローチには依然として課題がある。本日の協議会で有意義な意見をいただき、今後の図書館運営に反映させ、活性化を図りたい。

3 自己紹介

4 報告・協議事項

（1）令和7年度図書館事業実績報告及び利用状況について（館長補佐）

・令和2年度のコロナ禍から令和6年度にかけて来館者数は回復傾向にあったが、令和7年度は来館者数・利用者数ともに前年度を下回り減少した。また、貸出冊数も年々減少傾向にある。

・アステシアかさいのテナントであった「コープ」が閉店して、アステシアかさいの来客者数が前年比57%減となった。コープに買い物に来たついでに図書館を利用していた層が大幅に減ったと推測する。

・最も利用が多いのは70代。最も少ないのは16～18歳の高校生である。この傾向は令和4年度から継続している。それ以前は40代の利用が最も多かった。

・0～12歳の児童層は、学校連携事業（団体貸出や出前講座など）が功を奏し人口減少下でも令和6年度までは微増傾向にあったが、令和7年度は前年比で減少した。

・レファレンス件数は前年比で伸びているものの、難易度の高い調査を要するレファレンスの件数は横ばいで、簡易的な案内が増加している。職員のレファレンス技能向上のひとつとして国立国会図書館のレファレンス共同データベースに登録し、加西市での事例を積み上げ、公開を開始している。

・電子図書館サービスは導入から約3年が経過した。前年と比べると貸出回数は横ばいだが、閲覧回数は増加傾向にある。利用を促進するため、従来の紙媒体では購入しない資格検定の問題集を導入したところ、予想以上に貸出があった。

委員：30～40歳代の子育て世代の利用の年々減少しているのか。減少しているのなら、その要因を分析しているのか。

事務局：減少している。要因は共働き世帯の増加や保育料無償化による影響があると考ええる。昔は平日の夕方に親子で来館する姿があったが、今はほぼ見られない。

委員：0～6歳の利用について、これは子が借りているのか、親が借りているのか。

事務局：親が子どものカードを利用して、絵本などを借りるケースが多い。5.6歳になると自分で絵本を選んで自動貸出機を利用する子どももいる。

委員：70歳代の利用が増えている。孫を連れてこられて、孫の本を借りているのではと思う。

教育部長：資料にあるように、貸出数について、70歳代は利用が増えていて、0～12歳も増えているがそれ以外の層は減少している。

事務局：高校生の利用が一番少ないというデータを示したが、これはどうしても勉強や部活動、塾などで忙しく、本を借りる時間がないという时期的な要因が大きい。

委員：高校生は図書館を自習スペースとしては非常に利用している。館内の自習スペースは朝からぎっしり埋まっており、学習場所としてのニーズは非常に高い。

委員：日本国内や海外に目を向けると、素晴らしい図書館の事例がたくさんある。図書館を1日中快適に過ごせる滞在型の施設にすることが重要である。国内の事例として、石川県白山市では、学校司書が各学校に配置されており、図書館と連携した調べ学習や読書指導を行っている。利用者が年間3万人にのぼるなど、地域全体に図書館に行く文化がしっかりと根付いている。図書館を生活の身近な場所に置き、図書館はこんなに面白くて楽しい場所ということを子どもの頃に体感すると、大人になっても図書館を利用し続けると言われている。また、今後は学校図書館ファシリテーター（学校と図書館とをつなぐ教員の指導者）を育成するような講座・プログラムを教育委員会とともに作っていく必要がある。ボランティアの方々の中からも、単に言われた作業をするだけでなく、子どもたちを読書へ導くセッティングやサポートができるファシリテーターを育成していかなければ、本当の活字離れ・図書館離れを食い止めることはできないと感じている。

委員：先月に岐阜市中央図書館主催のオンライン講座で学んだことを紹介する。岐阜市にある複合文化施設「みんなの森ぎふメディアコスモス」の初代館長の吉成信夫氏は、「子どもの声は未来の声」として、子どもたちの来館を温かく見守る方針を掲げた。同時に、保護者に対し

て図書館は公共の場所であり、子どもに公共のマナーを教える教育の場として活用してくださいと発信した。子どもだから静かにできないと排除するのではなく、また逆に子どもだから騒いでも良いと甘やかすのでもなく、公共のマナーを学ぶ教育の場として図書館を活用するという考え方は、本当に素晴らしいことである。

(2) 令和8年度図書館事業計画(案)について(館長補佐)

①定期休館日(水曜日)の導入経過

令和8年4月1日より毎週水曜日を定期休館日としているが、窓口等での混乱や目立った苦情やトラブルは発生していない。また、水曜日に別の場所で新聞を読めるようにしてほしいとの要望があった。休館日を設けた理由である職員の働き方改革や持続可能な運営といった趣旨と閲覧場所を作ることは難しい旨を説明している。

委員：昔は市役所の1階ロビーに新聞が置いてあった記憶があるが、今は置いていないのか。

事務局：以前は置いてあったが、現在は市役所1階には配架していない。

委員：最近話題になるコミュニティスクールの取組のなかでも、学校の空き教室を活用して地域住民の交流スペースを作り、そこに地域の人々が自由に立ち寄って新聞などを読めるようにしている自治体の事例を聞いたことがある。そういう活用の仕方も考えられるのではないか。

委員：学校の教室活用について、法制度上、学校の教室には空き教室と余裕教室の2つの区分がある。空き教室として明確に教育委員会に登録を行うと、そこは老人会が使おうが、地域住民が新聞を読もうが、誰がどのように活用しても法的には全く問題はない。しかし、実際には将来的な児童数の急な増減に対応するため、一時的に空いている状態であっても、学校としては余裕教室として手元に残す傾向が強い。そのため、地域に完全開放することは、ハードルがかなり高いというのが実情である。

委員：学校現場ならではの現実的な課題があり、難しいことがわかった。

②館内BGMの導入

令和8年4月1日より3階フロア限定でイーजीリスニングをBGMとして流し始めた。苦情はないが、明確な賛同の声もない。選曲において、集中力向上の音楽などもスタッフで試聴したが、聴く人によっては体調に影響するものがあったため、全員が快適に聴けるイーजीリスニング名曲集を選定している。

委員：私はよく図書館を利用するが、ほとんどBGM音が聞こえないと感じている。音が小さすぎるのではないか。多くの利用者がいる時は、音が吸い込まれて全く聞こえなくなっているような気がする。

事務局：本日、BGMを流しているが、休館日で利用者がいないためによく響いている。開館しているときの混雑時などは、BGMが周りの音に消されている可能性がある。

委員：利用者が多い時間帯はもう少し音量を上げるなど調整をすると、より効果的だと思う。ただ、あまりうるさくなりすぎず、雰囲気を壊さない程度で工夫してもらえればと思う。

③公民館との連携（本の託送サービス）

週1回から週2回へ拡充をしている。この取組により、貸出数も増加傾向にある。特に善防公民館での利用件数が最も多く、地域に制度が浸透している。

委員：公民館で来られた方に、この制度について、積極的に声をかけて宣伝している。どれくらいの効果が出ているかは分からないが、地域の方々には本当に喜ばれていると感じる。

事務局：公民館の方が一生懸命に宣伝してくださっているおかげである。引き続き各公民館と連携し、宣伝を行う。

④読書マラソン大会、図書館コンサートの開催等

（3）図書館の活性化を図る取組について（館長）

令和12年度までに、1日あたりの来館者数をコロナ前の水準である603.5人に引き上げる目標を市の総合計画に上げている。現状として、令和7年度実績は1日平均549人であった。特に中高生や30～40代（子育て世代）の利用者が減少しており、この層への対策強化が必要である。多様な世代が来館したくなる魅力ある空間づくりを考えて、次の3つの活性化事業を行う。

①恐竜の卵の化石展示（R8.7.16～）

（株）千石の元社長から泉小学校へ寄贈され、保管されていた恐竜の卵の化石（本物と鑑定されたもの）を借り受け、3階に展示している。鑑定をしてもらった、たんば恐竜博物館から標本資料も借り受け、同時に展示することで、子どもたちが本を読むだけでなく、実際に本物を見て、触れて、知的好奇心を刺激される体験型の空間を作っている。

②漫画コーナーの充実

本への入り口としての漫画の重要性を考え、令和8年度中に3,000冊を目標に購入し、既存の2,000冊と合わせて蔵書数5,000冊を目指す。

③受験応援コーナーの設置

中高生が勉強のために毎日図書館に通うという日常的なサイクルを作るきっかけにしたい。3階の雑誌コーナー奥のスペースに、自習スペースと受験対策資料を一体化したコーナーをつくる計画を立てている。こうした事業を通じ、加西市立図書館を単に静かに本を借りるだけの場所から多様な世代が集い、学び、驚きや交流を体験できる図書館へと変化させ、来館者の増加と満足度向上を同時に達成していきたい。

委員：いろいろな取組をたくさん考えていただいている。特に受験応援コーナーや、受験に役立つ資料の充実については、現在受験を控えている私の娘の姿を見ていると、非常に強く求められているサービスだと思う。受験応援コーナーができ、役立つ最新の資料が揃うとなれば、図書館を勉強の場として活用する受験生がさらに増えると思う。

委員：漫画コーナーについてだが、漫画はどのように選ぶのか。

事務局：漫画の選定を公立図書館として適切に行うため、令和8年6月1日付で「加西市立図書館資料収集方針及び選定基準」を一部改正した。従来の収集方針に「漫画資料」の項目を追加

している。また、完結作品、社会的価値のある作品、受賞歴のある作品、郷土ゆかりの作品を優先すること、表現内容を慎重に確認することなど具体的な選定基準となる「加西市立図書館漫画資料収集等に関する方針」も策定した。その方針をもとに選ぶ。

委員：この方針は、日本図書館協会（JLA）が示している一般的な図書館の選定基準とほぼ同等の健全で安心な内容であるので問題ないと思う。

委員：私の娘の話になるが、小さい頃から図書館が大好きでよく通っていた。中高生になると忙しくて行かなくなった。本人も忙しくて、行けない、本を読むひまがないと言っている。示されたデータどおりだと思った。しかし図書館を利用する際には参考書など勉強に役立つ資料を探しているので、受験応援コーナーができれば宣伝してほしい。

事務局：現在も4階展望読書室において、利用者から善意で寄贈していただいた大学の赤本を置いている。また、兵庫、京都、大阪などの主要私立大学の最新の大学案内・入試要項パンフレットを無料のサイトから取り寄せて設置しており、中高生が自由に持ち帰れるようにしている。さらに、4階ヤングコーナー付近に中学生向けに兵庫県第3学区の公立高校や私立高校の入学案内パンフレットも置いており、進路選択の参考にいただいている。

委員：非常に惜しいと感じるのは、こうした大学の赤本や進学パンフレット、高校案内がすでに今でも置かれているという事実が、中高生やその親にほとんど知られていないということだ。いくら良い資料を揃えて置いても、知られていなければ存在しないのと同じになってしまう。広く宣伝をする必要がある。

委員：委員のなかで商工会議所の方がおられるので、商工会議所と図書館が協力をするというのはどうか。例えば、小・中学生の調べ学習発表を図書館で開催し、テーマを「魅力ある加西の街づくり」として商工会議所の方に審査員としてプロ視点で評価してもらう。図書館で開催すれば、そこに居合わせた多様な世代の市民が子どもの発表を聞き、感想を述べる場をすることで、子どもに成功体験を提供し、来館動機を高めるとともに未来の人材を育てるという素晴らしい試みになるのではないか。さらに、子育て世代への働きかけとして、定期的に図書館内で保健師等による育児・発達に関する相談会を開催し、その際に関連する書籍を紹介することで、子育て世代にとって、図書館はこれ以上ないほど心強く、暮らしに密着したかけがえのない場所になる。このように多世代の生活に入っていくことが、中長期的な来館者の回復と、真の図書館の活性化につながると思う。

事務局：具体的な案をいただきありがたく思う。他部署や外部団体との連携、そしてPRの必要性は大きな課題である。昨年度から、市の長寿社会課と共に認知症を正しく知るためのイベントを館内で実施している。市の保健師等が図書館へ出向いて市民向けにお話をし、図書館のスタッフが、認知症やシニアの健康に関する本を紹介し貸出するという取組をしている。良い手応えを得られたので、今年度もさらにPRをして実施する予定である。子育て支援や商工会議所との連携アイデアについても、非常に可能性を感じる面白い切り口である。実施に向けて、前向きに検討を進める予定である。

（4）加西市子ども読書推進計画（第4次）スケジュールについて（館長）

国・県の第5期計画を踏まえ、現在計画素案を作成しているところである。加西市の子ども

の読書活動の状況を把握するために、園児の保護者を対象にアンケートを実施中で、8月中に集計・分析を完了する予定だ。小・中学生については本年度行われた全国学力・学習状況調査のデータを活用し、庁内関係部署と協議する。秋に第2回図書館協議会を開催させていただき、委員の皆さまに完成した新しい計画の素案について審議をお願いしたいと考えている。その後、教育長の決裁を経て、パブリックコメントを実施し、令和9年2月下旬に定例教育委員会へ上げ、続いて図書館協議会で最終報告の予定である。完成後、ホームページに公開し、関係部署に配布する。また、第2回協議会については、委員の皆さまに集まっていただきたく思うが、書面開催も可能であることから、どちらが望ましいか。

委員：定例教育委員会にかかるタイミングについて、パブリックコメントを実施して市民の意見を反映した後に、教育委員会の承認を得るという順番で問題ないのか。

教育部長：市民の皆さまからのご意見を踏まえた最終的な修正をすべて終えた後に、定例教育委員会へ上げて、計画を確定させる流れとなるので、その順番で間違いない。

委員：開催方法について、対面開催とするべきだ。事務局から、これまでの流れや計画の意図を説明していただいた上で、議論を行う方が、質が高く中身の濃い計画書になると思う。

委員：対面開催を希望する。計画について深く議論すべきだ。国・県の計画は予算コストを考えるので最も重要な人材育成（人づくり）の視点が欠落している。図書館の活性化やサービスの質向上につなげるには、現場に優秀な司書や教育されたボランティア・教員などの「人」が存在するかどうかで決まる。ボランティアに対しても善意に頼る甘い姿勢ではなく、質の高いサービスを提供するための研修が必須である。国・県の欠点を補い、司書・教職員・ボランティアを体系的かつ継続的に育成することを盛り込んだ、全国に誇れる人づくり推進計画とすべきである。

事務局：市の教育・文化の根幹に関わる熱意ある提案を受け、身が引き締まる思いである。第2回協議会是对面開催で調整する。提案のあった優秀な人材を育成する計画を盛り込むため、具体的な素案を用意し、深い議論ができるよう準備を進める。

5 連絡事項（なし）

6 副会長あいさつ

加西市の新しい計画が、国・県の通り一遍の計画にとどまらず、加西市独自の「人づくり」に根ざした新たな方向性へと踏み出し、素晴らしい形で完成することに大きな期待とワクワク感を感じている。今回の協議会では委員の多様な立場から広い視野の貴重な意見が得られた。多様な視点で図書館の未来を議論することの重要性を改めて深く実感した。

閉会（16：45終了）